

〔研究回顧〕

## 学問と歩む人生 —— 歴史研究・東洋哲学・伝統医学 ——

堀 毅

### ◎ 学問との出会い

近年、特に理科系の分野で、博士の学位を取得しながらも、定職に就けず不安定な身分におかれている人々が増加し、社会問題化しているが、人文・社会の分野でも状況は厳しくなっている。

18歳人口が減少の一途をたどり、大学も将来の経営を見込んで新規の教員の採用を控えていることが主因であるが、その傾向は、2020年に向け益々顕著になってくる。かくて、将来的展望の見えない状況下で、専任教員を目指す少壮の研究者は、日々研鑽に励み、就職の機会をうかがうのである。

さて、私は、幸運にも30代で学位を授けられ、中央学院大学・法学部に専任教員の職を得た。爾来、“身過ぎ世過ぎ”の憂いなく学問研究に没頭出来たが、そこに至る経緯を振り返ると、主に二つの要因が思い当たる。

#### ☆時代的背景

1980年代、当時はバブル時代の前夜ともいえる状況で、日本社会では高等教育の需要が高まり、大学の新設や学部の増設が求められていた。

若手の研究者にとって、全身全霊で学問の研鑽に励めば、将来への道が

開かれる、という良き時代であった。

### ☆中国における文書の発見

私は、会社勤務などを経て、大学院において東洋史を専攻したが、研究テーマは中国古代の法律史であった。

当時、中国の法制に関する史料は極めて限られており、先学諸賢により築き上げられた学問の体系に挑むことは容易なことではなかった。

しかし、東洋法制史という分野を自ら選んだ以上、先が見えないといって退却するのも情けない。背水の陣をしき、与えられた時間を研究に打ち込んだ。

1976年、この年は中国では、周恩来・毛沢東の逝去、文化大革命の終焉など様々なことが起こった。

更に、個人的には、全く想定もしなかった一大事件が起こった。

湖北省雲夢県の墓地から、秦代の法律文書が出土した。これは中国古代法律史の分野では最大級の発見で、未曾有の出来事であった。

今を遡る2100年前、中国では秦の皇帝による専制政治が確立された。その後、漢・三国・魏晋南北朝・隋・唐などの歴代王朝を経て、20世紀の初頭まで、帝政は保持された。

一方、法律制度の分野では、唐代以降の律令などはかなり詳しいことが分かっている反面、秦・漢から隋に至るものについては、律令の本文などがこぞって散逸し、研究の手がかりは極めて限定されていた。

このような状況下において、“青天の霹靂”のごとく出現したのが秦代の法律文書であった。私にとって、この発見はまさに“値千金”の賜物であった。

すなわち、従来の研究は、“万卷の典籍を渉獵し、千里の行程を歩む”というのが唯一の方法であったが、この文書の発見により、2000年余、地中に埋没されていた法律文献を直接一次資料として研究対象とするとことが可能となった。

当時、大学院生であった私にとって、この文書は格好の研究テーマとなり、早速、その解読に取り組んだ。その後の数年間というものは、寝食を忘れ、文書の研究に明け暮れ、博士課程修了後、学位論文《秦漢法制史の研究》にまとめ上げた。

浅学菲才の私が成果をのこすことができた要因は偏にこの文書の出土という僥倖に巡り合えたことに尽きる。

また、“天の時”が絶妙なタイミングで私に研究の機会を与えてくれたことも忘れることはできない。若しこの文書の出土が10年早ければ、先輩の研究者の後塵を拝することとなり、また、10年遅ければ、二番煎じに甘んじることになった。

## ◎ 中国思想の多元性

“諸子百家”で知られるごとく、中国の思想・哲学は広範にして奥行きが深い。

とりわけ、儒家・法家は統治の学としては大きな比重を占める。

秦の時代は法家が主流で、漢代から儒家の要素が加味されてきたというのが一般的な理解であるが、一概にそうとは言えず、社会情勢などの影響で、様々な要素が絡み合っていた。

中国思想・文化の奥義を尋ねると、この国独特の精神文化に行き着く。それは思考方法の多元性である。

わが国において、知中家（中国について一家言を持つ人）と称される人は星の数ほどいるが、各々の中国に対する観方は多様である。

概して医学や財政学などの分野は専門性が高く、一般の人はその領域につき介入しにくいだが、中国の文化・思想などに関しては、様々なジャンルの人が独自の所論を展開している。

論客は、大学などの研究者・ジャーナリスト・外交官・在日中国人・文

筆家・企業の駐在員・旅行者など多士済々である。

我々研究者は得てして学者以外の意見を軽視しがちであるが、それは慎むべきであろう。

中国の社会は、長い歴史・広い国土・多民族の人口構成など、多面性を持つものであり、一つの側面からでは、その全体像を知ることはできない。

私は、かねてより、中国人の思考方法につき関心を寄せていたが、このテーマについて、さまざまな分野の方々より有益な示唆を受けた。

☆ 日本文明に関する評論家の森本哲郎氏は、中国文明の特質は二元的バランス感覚にあるとした上で、物事を上から見おろす第三の目の存在を指摘した<sup>(1)</sup>。

☆ 地球物理学者の竹内均氏は、物理学者・湯川秀樹がノーベル賞を授与されるに至った要因として、老荘思想との出会いを紹介している<sup>(2)</sup>。

☆ 戦前の中国東北部で青年時代を送った中国研究家の村山孚氏は、中国人のものの観方は、多面的・立体的であると指摘する<sup>(3)</sup>。

☆ 作家の陳舜臣氏は、「日中」複眼の視野で歴史を観察した。

陳氏（1924～2014）は日本生まれでありながら、台湾にルーツを持ち、父の代に台北から神戸に移住、大阪外国語学校（現：大阪大学）でインド語を専攻した。

日本の敗戦後、1946年台湾に帰国したが、1947年台湾の国情不安のため、再び訪日その後、定住。

陳氏の場合、“複眼”とは、日本人として中国、また中国人としての二つの視座を指すという点で、上記の意味とニュアンスが異なるが、いずれにしても、多元的な視野に立った歴史観が多くの読者の支持を得たのであろう<sup>(4)</sup>。

また、大阪外国語学校出身の作家と言えば、司馬遼太郎氏（1923～1996）の名が思いあたる。司馬氏は大学で、モンゴル語を専攻し、新聞記者を経験したのち、作家活動に入った。陳氏と司馬氏は同窓の誼もあり、50年以

上にわたる交流を深めた。

諸賢による中国思想に関する見方は、必ずしも軌を一にするものではないが、いずれも高い識見をそなえ傾聴に値する。

既述のとおり、中国社会は、多元な要素で構成されており、世界観も、愛情・衣・食・住・金銭・面子・名誉・健康など各人各様である。最近しばしば取りざたされている格差の問題も益々顕著になってきている。

ただし、書物やマスコミにより形成された風評や世論は現実と遠く遊離しており、真の中国を知るためには、現地での生活の経験が不可欠である。

現地での生活は、想定外の出来事の連続であるが、衣食住や生活万端にわたり多くのトラブルを経験することにより、対処法が自然と身につく。

中国の生活において、常に心掛けたのは、①細事に拘らず大きな尺度で物事を測る、②多元的な思考で柔軟的に処する、ことであったが、その根底には老荘思想があった。とりわけ“知足”の心得は、その後の私の人生に大きな変化をもたらした。

中国の風土は悠久な歴史と深遠な文化に培われており、奥が深い。進取の気持ちでこの社会で生きれば、人生は彩り豊かになる

また、人との交流にも意を注いだ。その結果歴史家・法律家・医学者など幅広い知己を得ることができた。また、専門棋士の指導や、京劇の俳優さんたちと交流できたが、その経験は、その後の人生にとって貴重な財産となった。

## ◎ 中国思想と“知足”

西洋社会を代表する聖人がキリストであれば東洋社会を代表する聖人は釈迦・孔子・老子であろう。

孔子が興した儒教は、倫理性が高いという点で、キリスト教に相通じるが、仏教と道家思想（以下、老荘思想と称す）はキリスト教や儒教ほど高

い倫理性はなく、善と悪、黒と白を厳しく分別する性質は有しない。

反面、奥行きの高い哲学性を含むという点で共通する。

この両者に共通する要理に“知足”という概念がある。

本邦においては、“知足”は主に仏教用語として知られる。端的な例としては、石庭で知られる京都の龍安寺の蹲踞に見られる。(下図1参照)

その蹲踞の文言を上から時計回りに読むと、“吾唯足るを知る”と読める。この句の由来するところは、仏典《遺教経》〈知足の人は地上に伏すと雖も、なお、安楽なりとす。不知足の者は富むと雖も貧し。不知足の者は五欲のために牽かれて、知足の者のために憐憫せらる。これを知足と名づく〉にある。

上文からも読み取れるとおり、仏教における“知足”とは“五欲のために牽かれる”ことを絶つこと、すなわち、禁欲を意味する。

“知足”という言葉は、江戸期の日本の文献に見られるが、現代では常用されることはない<sup>(5)</sup>。

一方、中国においては、“知足”という言葉は幅広く用いられている。

《老子》に〈足ることを知れば辱められず。止まることを知れば殆うからず、以て長久たるべし〉とあるごとく、“無為自然”を至上の命題とする老荘思想の必須の要理である。つまり、知足はそれ自体、奥行きの高い哲学的意味を帯びている。

また、一般庶民の生活の上でも、“知足”という言葉は人口に膾炙しており、その意味するところは、“現状は満足とはいかないまでも不満はない”というニュアンスをもつ。

(図1；知足図)



わが国で“養生”と言えば、江戸期の貝原益軒の名が思い浮かぶが、益軒翁の養生論はまさに老荘の思想が基礎となっている<sup>(6)(7)</sup>。

## ◎ 近年の関心事

私の研究生生活は、必ずしも順風満帆ではなかった。

60歳の時、かなり重症の大腸がんに侵された。担当医により、“ステージⅢの直腸がんで、5年後の生存率は50%”と、宣告された。

2005年1月に開腹手術をしたが、結果次第では、その年の5～6月には、命を落とすことになる。

このようなことは、全く想定外であったので、些か困惑したが、このために夜眠れないとか、鬱の気分に落ち込むようなことはなかった。

その5年後にも、腹部に大きな疱疹が現れ、どうなることかと心配したが、手術のお蔭ですっかり完治した。原因は現代医学をもってしても不明のままである。

この十年間、再度にわたり絶命の危機に曝されたが、何とか凌ぎ切り、健康体で人生の再起動をなし得た。

ごく当然のことであるが、人にとっては健康が第一で、重篤な病に侵されたり、夭逝したのでは、その人生は徒花に終わる。

ところが、人は平素余り健康には留意していない。周囲を見ても、同級生などで既に鬼籍に入った例も少なくなく、半健康的な生活を余儀なくされている人も多数いる。

八十・九十の齢を重ねても益々壮健な人と、五十・六十の壮年であるにも拘わらず疾患に侵されている人との違いは何だろうと自問してみたが、その結果、健康に関する心得にあるとの結論に辿り着いた。

## ◎ 伝統医学の探求

中国滞在中、中医（中国伝統医学）を研究する機会を得た。中医では、人を小宇宙ととらえ、人体を細胞とする西洋医学と全く異なった概念を構

成する。

中医の研究は、とかなおざりにしていた自身の健康について、考え直す良い機会であった。

中国で生活してみると、生活面では民間療法の知識があまねく浸透し、医療面でも伝統医学がいまだに大方の支持を得ている。

すなわち、中国では医学の主流は西洋伝来の医学に道を譲ったといえども、二千年余の経験に立脚した伝統医学も脈々と生き続け、国家の医療行政においても、それを西洋医学と同格のものとして位置づけている。

日本では明治時代の“医制”により、伝統の漢方を排除した。それ以来、漢方は正当な学問として認められず、西洋医学に従属し、それを補完するものとされた<sup>(8)</sup>。

大学の医学部の科目はほとんどすべてと言っていいほど西洋医学の系統であり、医師の国家試験も西洋医学に準拠している。

かくて、わが国では明治時代の国会の決議に基づき漢方は異端として扱われ、市井において“漢方医”の看板を目にすることは稀有となった。

私の個人的な経験から言っても、今日の日本においても西洋医学一辺倒が最善であるとは思えない。

2009年5月、当時、在外研究で中国に滞在していたが、研究生活の疲れがたまり、今まで経験したことのない激しい腰痛に苦しめられた。

幸いなことに、友人に市立病院の中医の先生がいたので、その人から鍼灸の先生を紹介され、治療を受けたが、まるで魔法にかかったように激痛は消え去り、その後、5年余り、再発することはない。

治療の効果があまりにも鮮やかであったので、それ以来、すっかり、漢方の魅力にとらわれた

そこで、まず、日本社会の医療の歴史と特質をたどり、次いで、貝原益軒の論著の内から養生の心得を考察した。医学のカテゴリィに関する研究は初めての経験であり、執筆には予定の3倍以上の期間を要したが、想定外の収穫も得ることができた。



すなわち、文献で得た“養生の心得”そのものを日々実践することにより、精神と身体がすっかり健康となり、養生の実践が生きがいになってきたことである。

養生はいわゆる漢方の系譜に属するものであり、その奥義を極めるため、私の関心は、漢方の基礎的研究に向かった。

その成果として、〈東洋医学と西洋医学〉<sup>(9)</sup>〈現代養生論〉<sup>(10)</sup>の2本の論考をまとめた。

さらに、三部作のまとめとして、わが国医療の問題を伝統医学との関連において提起した<sup>(11)</sup>。

#### 注

- (1) 中国文明の特質はバランス感覚にあると考えます。これは中国というより、東洋全体についていえることですが中でも、中国、常に二元的なものの方であって、その原理があらゆるところに貫徹しています。そこで私は、中国文明を「二の文明」と呼んでいるのです。それともう一つ、中国人の考え方の中には、物事を上から見おろす第三の目があることも忘れてはなりません。言い換えると、大局的な視点ですね。ところが日本人は平面的にしか、別言すると、極めて近間でしか考えられない。(〈精神バランスとしての儒教と道教〉《歴史街道》1993年1号)
- (2) わが国の生んだ偉大な物理学者・湯川秀樹(1907-81)は老子を深く尊敬していた。湯川の父・小川琢治は地質学者であり、京都大学の教授をもつとめていた。漢学に対する理解も深く、この父や祖父から若き日の湯川は『論語』や『孟子』を教えられた。しかし、『老子』や『莊子』は教えられなかった。『老子』や『莊子』を盗み読みしているうちに、湯川はやがて中間子理論に対する重大なヒントをそこから得たという話が伝わっている。(〈科学者からみた二つの教え〉《歴史街道》1993年1号)
- (3) 中国の現象について、第一は、何事であれ、一面だけを見ないということだ。何しろ中国は複雑である。より正確にヒントを合わせようと思ったら、多面的・立体的に見なければならぬ。日本人はとかく単眼である。善か悪か。当か不当かなどを簡単に決めつけてしまうのだ。  
第二は、あらゆる状況を歴史的に、しかも変化するものとしてとらえるということである。(『中国人のものさし日本人のものさし』1995年、草思)

社)

(4) 曹 志偉〈陳舜臣が複眼で見た日中関係—過去、現在、そして未来〉(《名古屋外国語大学外国語学部紀要》第38号、2010年2月)

(5) 日本では“知足”という言葉が、日常的に使われることは極めて少ないが、類語として“清貧”という言葉がある。

例えば、大富豪が、敢えて人里離れた山中に庵を結び、一菜一汁の質素な生活を送る光景をとらえて、人はこれを“清貧”と言う。一方、貧窮な状況に追われながらも、志だけは高く保つ生き方も“清貧”と称す。

“知足”と“清貧”は、相似た意味を有しているとは雖も本質的には異なる。すなわち“知足”が内面的な心の持ちようを表しているのに対し、“清貧”は外面的な状況を現している。また、言葉の響きからも、日本の情感すら感じられる。

(6) 〈現代養生論〉《中央学院大学・人間自然論叢》第39号、2015年1月

(7) 江戸期の養生書《楽訓》において“知足”について記述がみられる。

● 君子は足ることを知って貧らぬゆえ、身は貧しくても心は富んでいる。古い言葉に〈足る事を知る者は心富めり〉とあるとおりだ。小人は身が富んでも心は貧しい。貧りが多く飽くことを知らぬからである。それゆえ、ただこの楽しみを知って貧賤を気にとめず、富貴を願わぬ計りごとをすべきである。老いては、いよいよ貧らず、足ることを知って貧賤を甘受するがよい。

● わが身の足ることを知って分(天が自分にさだめた領域)に安んずる人はまれである。これは分の外を願うので楽しみを失うのである。知足の理をよく考えてつねに忘れてはならない。足ることを知っていれば貧賤にあっても楽しい。足ることを知らないと、富貴をきわめても、なお飽きたらず楽しめない。こういう富貴は、貧賤な人の足るを知っているのにはるかにおとる。富貴貧賤は賢愚によらず、ただ生まれついた分がある。古人の詩に「耕牛宿食(たべのこした食)なし、蔵鼠余糧あり」とあるようなものだ。賢者でも貧しく、不肖の子で富んでいる人も多い。これは生まれついた分である。分に安じて、分外をうらやんではならぬ。分外を願う人は楽しみがなく、憂いが多い。禍はまたここからおこる。愚かというべきだ。(〈卷上・総論〉)

(8) 漢方に類する用語には、“東洋医学”“民間療法”“和漢薬”“中国医学”などがありながら、それらの意味するところは一律ではない。

● 伝統医学 現代西洋医学に対比する概念で、中国の他、アラビア・インド・日本・韓国などで伝承された医学の総称

● 東洋医学 日本においては東洋という字句は西洋と対比して用いられるが、中国においては、東洋人・東洋貨など、いずれも日本を指す。ちなみに、日本の大学などでは、世界史を西洋史・東洋史と分類するが、現代中国語に照らすと不適切である。

● 中医（中医学） 東アジアにおける伝統医学は中国に由来するが、現代中国の領域において正当なものとして政府から認められたもの。なお、中国はチベット・ウイグル・モンゴルなど多民族から構成されているが、政府はそれら少数民族の医療も中医に分類し、保護を与えている。

● 漢方 1500年ほど前に中国から伝来し、日本の風土の中で独自の発達を遂げた。明治政府の政策により、マイナーな地位に追いやられたが、その誤りを正すべく復権が試みられている。

和漢薬・皇漢医学などの呼称もあるが、これらは、民族性を織り込んだもので、根本的には漢方と同義である。

なお、通信販売などで“漢方”或は“漢方に由来する”などと謳っているクスリやサプリがあるが、それは本来の漢方とは次元を異にするものであり、注意を要する。

- (9) 〈東洋医学と西洋医学〉（《中央学院大学 人間自然論叢》第38号、2014年）
- (10) 〈現代養生論〉（《中央学院大学 人間自然論叢》第39号、2015年）
- (11) 〈文化遺産としての伝統医学—日中医療制度の比較—〉（《中央学院大学 人間自然論叢》第40号、2015年）